

## 研究報告

# ビジュアルなグラフィックなどによる「心理学」教育の試みと効果

糸田尚史\*

(名寄市立大学 保健福祉学部 社会保育学科)

キーワード：グラフィック、ビジュアル、専門職連携教育（IPE）、保健福祉、「心理学」教育

## はじめに

1978年から2020年の現在に至るまで40年以上、独自に創案した項目で、大学生にもプロフィール帳（サイン帳）を書いてもらってきた。記入してもらった項目は1978年当時のものを、現在もそのまま使用している。当然、時代や文化の変容に伴い、書いてもらえずに空欄のままになる項目が出現してくる。その1つが「好きな（好きだった）ラジオ番組」という項目であった。1978年当時、受験生や大学生は多くがオールナイト・ニッポンなどのラジオの深夜放送のリスナーであった。しかし、現代の大学生においてラジオを聞く文化は衰退してしまった。そしてまた最近、記載がみられず、空欄が目立つようになってきている項目がある。それは、「好きな（好きだった）漫画」という項目である。漫画を見ない（読まない）大学生が以前よりも増えているように思われる。

2019年6月に、MK・サーウィック、イアン・ウィリアムズ、スーザン・メルル・スクワイヤー、マイケル・J・グリーン、キンバリー・R・マイヤーズ、スコット・T・スミス著（小森康永・平沢慎也・安達映子・奥野光・岸本寛史・高木萌訳）『グラフィック・メディスン・マニフェスト：マンガで医療が変わる』（北大路書房）が日本でも翻訳・出版された。2019年6月28日に開催された日本家族療法学会第36回北海道大会でも大会企画「医学教育と患者ケアにマンガを使おう！—グラフィック・メディスンのすすめ—」としてシンポジウムが行われている。原著の『GRAPHIC MEDICINE MANIFESTO』の出版は2015年であった。これは、専門職教育や仕事、そして人生において、もっとマンガを利用しようという専門職教育アプローチの1つであり、患者・医療者・アーティストなども含まれる学際的研究の新興領域でもある。

邦訳に付された副題のとおり、よりよい医療や保健福祉教育へと「マンガで医療が変わる」のであれば、保健福祉系大学の授業でも秀逸なマンガをもっと積極的に取り上げて読み合ったり、自らも描いたりし、そこからまた「好きな（好きだった）漫画」を挙げることでできる大学生を増やしていくような教養教育や専門教育が期待される。

## 1. 目的

マンガといえば1969年に始まった国民的漫画「ドラえもん」は、2019年に50周年となり、2019年12月には、藤子・F・不二雄著『絵本まんが：はじめてのドラえもん』（小学館）が、その帯紙には「子どもがはじめて読むまんが」「おとなもいっしょに読む絵本」「見ているところがまるくなる」と記され、出版された。これからは初めてのまんがも、大人が子どもに絵本のようにして主体的に読み聞かせ、まんがを読む子どもたちの数の回復をはかり、やがて大学生になったときに「好きな（好きだった）漫画」の項目も空白のままにせず記載できるような子どもや大人に育てていこうという新しい文化が求められているのかもしれない

---

\* 責任著者

糸田尚史 itochan@nayoro.ac.jp（メールアドレス）

い。「グラフィック・メディシン・マニフェスト」によれば、マンガなどグラフィックな視覚イメージを用いた専門職教育のほうが、そうでないものよりも、より教育的な効果をもたらし、よりよい医療や保健福祉教育へとつながると考えられ、ケアを受ける人々のウェルビーイングや幸せのためには、良質のマンガを見たり、読んだりできる学生や専門職者を増加させていく必要がある。

名寄市立大学は、学科こそ栄養・看護・社会福祉・社会保育の4つから成るものの、学部は保健福祉学部が1つだけという（総務省からの補助金は）“医療”系の保健福祉大学である。開学以来、専門教育科目だけでなく、学部共通科目や専門職連携教育（**Inter**professional **E**ducation；IPE）科目などの学際的な教育科目にも力を入れてきた。筆者が担当している「心理学」の講義も、保健福祉学部の栄養学科・看護学科・社会福祉学科・社会保育学科という4学科の2年生が履修する学科横断的で専門職連携教育（IPE）的な教養教育科目であり、講義ではマンガ・イラスト・アニメなどグラフィックなものをスライドで意図的に提供することにより、専門教育における「マンガで医療が変わる」という新興領域の発展にも寄与できる基礎教育ともなるように授業を組み立てている。

2018年1月発行の雑誌『N：ナラティブとケア 第9号』では やまだようこ編「ビジュアル・ナラティブ—視覚イメージで語る」の特集が生まれ、巻頭論文は やまだようこ著「ビジュアル・ナラティブとは何か」であった。そこでは、ビジュアル・ナラティブは医療のあり方を省察し、変革する力をもっているとして、イアン・ウィリアムズらによる、患者と医療者とアーティストが協働して、「病い」の経験をマンガ、絵本、アニメなどで伝え、「病む」とは何かを問いかえし、医療の変革を迫り、新しい医療者を育てケアする教育活動でもある「グラフィック・メディシン」にも言及している。そして、やまだ（2018）は巻末の編集後記で、次のように纏めている。

視覚イメージは、古代の壁画や彫像にはじまり、絵巻物や室内装飾、そして漫画やアニメまで、古今にわたって日常生活にあふれています。視覚イメージは、ときには、ことば以上に大きな働きをしているといっても良いでしょう。しかし、学問は依然としてことばや論理で成り立っています（傍線は筆者）。ビジュアルで感じ、ビジュアルで考え、ビジュアルで語るとはどのようなことでしょうか。学問的な研究はまだこれからです。ビジュアル・ナラティブは、従来の時間や空間概念を超え、新しい見方と方法論を切り開く可能性をもっているでしょう。（やまだ 2018）

また、2019年9月発行のサトウタツヤ・朝日秀朗・神崎真実編著『ワードマップ 質的研究法マッピング：特徴をつかみ、活用するために』（新曜社）のなかでも、やまだ（2019）は「ビジュアル・ナラティブ」について以下のように論じている。

**ナラティブ (narrative, もの語り)** とは、ことばによって語る行為と語られたものをさす。ビジュアル・ナラティブは、**視覚イメージ**によって語る、あるいは視覚イメージとことばによって語る行為である。（中略）ビジュアル・ナラティブは感性や直感によって伝える形式であり、**共感的コミュニケーション**に威力を発揮する。（中略）ビジュアル・ナラティブでは、人と人は並んで共存し、共鳴しながら、ともに同じものを見る「共同注意」を行う。対面した対話は対抗的になりやすいが、並んで同じものを見る三項関係では、共鳴的・共感的な雰囲気になる。（中略）現代社会では、ビジュアル・プラクティス、つまりマンガ、アニメ、映像ゲームなど、ビジュアルで考え、ビジュアルで語り、ビジュアルで伝える方法は、すでにポピュラーであり、大いに使われている。しかし、学問は旧態依然とした言語中心主義で語られている（傍線は筆者）。（やまだ 2019）

現代の大学における講義では、ICTの発達・進化に伴い、PCのパワーポイントなどによるスライドの映像によって一見ビジュアルになされているかのようにみえる。しかし、それでも学問はしばしば昔のままの言語中心主義で論じられがちであり、学問分野によっても異なるが、ビジュアルなグラフィックは必ずしもすべてのスライドにおいては用いられておらず、しばしば文字（ことば）だけのスライドが作成され、視覚イメージ的というよりは言語的に説明がなされてしまうことも少なくない。

そこで、筆者の「心理学」の講義では文字（ことば）だけしかないスライドを大幅に削減し、できるだけ

文字やことばや論理だけでなく、マンガ・イラスト・図・写真・動画なども貼り付けたビジュアルなスライドによる視覚イメージをも重視した授業を試みることで、そのことによる保健福祉領域の「心理学」学習における教育心理学的な効果を、学生の感想から探ることを目的とする。

## 2. 方法

2020年2月発行の雑誌『N：ナラティブとケア 第11号』では、野村春夫編「心の科学とナラティブ・プラクティス」の特集が生まれ、サトウタツヤが「心理学史におけるナラティブの役割」を著し、「同じ状況を経験しながら異なる語りが生じる」といった文化心理学的な“意味づけ”（meaning）の問題を心理学史的な文脈から考察している。そこでは、芥川龍之介の小説『藪の中』を題材にした黒澤明の映画『羅生門』において一人の男の死ということが三人三様に描かれていることや1892年にドイツのユーモア雑誌に掲載された「アヒル」にも「ウサギ」にも見える多義図形（“あひるか？うさぎか？”）を心理学者のジャストローヤ哲学者のウィトゲンシュタインが有名にしたこと、科学革命という考え方を広めたクーンは「認識の枠組み」が人間の知覚に備わっているということをむしろブルーナーから学んで「パラダイム」という語を使ったのではないかということやブルーナーらが“ブローケンB”と呼んだ図形はアルファベットの「B」にも数字の「13」にも見えることなどを例に挙げ、個人の「意味づけ」とナラティブとの関係について論述している。

われわれの名寄市立大学保健福祉学部では、「心理学」の講義を[表1]のように、1. 感覚・知覚・認知、2. 記憶、3. 思考・言語・知能、4. 学習、5. 感情・動機づけ、6. 性格・パーソナリティ、7. 社会と集団、8. 発達、9. 心理臨床 という内容と順番で、全15コマを講じている。そして、保健福祉学部という専門職養成の課程の「心理学」教育では、まず、「1. 感覚・知覚・認知」から始めることに大きな意味があると考えている。というのも、心理学では「感覚」「知覚」「認知」という研究領域においていちばんビジュアル・データを観察・実験・

[表1] 心理学の講義の単元とビジュアルなスライド数

No	単元	マンガ等を入れたビジュアルなスライド数
1	感覚・知覚・認知	240枚/全241枚(99.6%)
2	記憶	46枚/全49枚(93.9%)
3	思考・言語・知能	58枚/全60枚(96.7%)
4	学習	21枚/全21枚(100.0%)
5	感情・動機づけ	22枚/全22枚(100.0%)
6	性格・パーソナリティ	19枚/全19枚(100.0%)
7	社会と集団	53枚/全53枚(100.0%)
8	発達	27枚/全27枚(100.0%)
9	心理臨床	41枚/全42枚(97.6%)
計	全単元	527枚/全534枚(98.7%)

調査の手段として使用してきたという学問的な経緯もあるが、それ以上に、“あひるか？うさぎか？”や“ブローケンB”の類の多種多様なビジュアルなグラフィックを、「感覚・知覚・認知」という単元であれば、思う存分にスライドで繰り返し視覚イメージとして提示しながら、そのたびごとに「見えるか - 見えないか」について挙手してもらったり、時には所属の学科を超えて隣り合う学生どうしや友達と「そこに自分はどんな意味を見出したか」などについて語り合ったりしてもらうことができ、対人援助の専門職者養成を行う保健福祉学部で学ぶ学生たちに期待される「自己と他者との共通点および差異点との両方に気づく」という体験（絵本作家のヨシタケシンスケが障害者の知覚世界について伊藤亜紗から学んで創作した絵本『みえるとかみえないとか』の帯紙にある「おなじところをさがしながら、ちがうところをおたがいに おもしろがればよいんだね」）も得られやすいからである。

筆者が保健福祉学部の「心理学」教育で用いるパワーポイントのスライド数を数えてみると、この[表1]のとおり全部で534枚あった。そのうち、文字やことばだけで、ビジュアルな素材が貼り付けられていないスライドは7枚しかなかった。マンガ・イラスト・図・写真・動画などビジュアルなものが入ったスライドは534枚中527枚で、文字（ことば）だけでなく何らかの視覚イメージの入ったスライドが全スライドに占

める割合は98.7%、四捨五入すると99%になっていた。

講義で使用されるスライドの99%にビジュアルなグラフィックなどが入っているという「心理学」教育の試みが、学び手（学修者）に及ぼす教育効果については、全15回の講義を終えた学期末の時点で履修学生に「心理学の授業全体に対する感想」を書いてもらい、その記述データ（個人的ドキュメント）から考察するという方法を採用することにした。

なお、2019年度に限っては“特別”に、前期に開講された「心理学」（15回30時間）のうちの13回26時間は筆者が講義し、最後の2回4時間は名寄市立大学保健福祉学部教務委員会による“特別講義”として、「犯罪社会心理学：犯罪をする人に特有な心はあるのか？」と「生涯発達の社会心理学 時代史・準拠状況・個人史の交差：地方出身昭和39年中学卒業者の50年に亘る質的追跡調査から」について、社会心理学者の細江達郎 岩手大学名誉教授・岩手県立大学名誉教授 から講義していただいた。細江名誉教授も、細江(2001)や細江(2012)の著書に掲載された“絵”や“図版”などをわかりやすく用いて“図解”された「犯罪社会心理学」やライフワークとされた半世紀以上に亘る質的縦断研究での写真や動画を数多く用いた「生涯発達の社会心理学」を、とてもビジュアルに講演して下さった。

### 3. 結果

筆者による「心理学」の全講義終了時に記載してもらった受講学生（栄養学科・看護学科・社会福祉学科・社会保育学科）のすべてのコメント（個人的ドキュメント）の中から、ビジュアルなグラフィックなど視覚イメージの導入とその意味を語り合う共感的コミュニケーションの試みという「心理学」教育が有効であったと考えられる記述をまず抽出した。次に、“ビジュアルなプラクティス”に関して記述されている部分については筆者のほうで太字にした。また、筆者に「この箇所は強調したい」と思わせてくれた“もの語り”や“意味づけ”などについては、それがわかるように筆者のほうで、どちらかという個人内（イントラ）と思われる感想には傍線を、どちらかという個人間（インター）と思われる感想には波線を引いた。

#### 1) 栄養学科（「心理学」は選択科目）

【事例1】質問にもきちんと対応していただき、ありがとうございました。（栄養学科） 【事例2】素直に心理学という学問が面白いと感じました。（栄養学科） 【事例3】私自身も講義中にすっかり何度もだまされてしまいました…「気になる！」「なんで！」…私たちの心理を操っている講義だと思いました。（栄養学科） 【事例4】いつの間にか楽しんで講義を聞いていました。心理学以外の講義も、もちろん話は真剣に聞いていますが、「将来管理栄養士になるために必要なこと」だと自分に気合いを入れながら講義をうけています。しかし糸田先生の講義はおもしろくてついつい聞いてしまいます。正直言うと、講義を受ける前は、他の科目の課題でもやろうかなと思っていたのに、気がついたら完全に先生の話に引き込まれています。これも先生の心理学を生かした話術のせいなのかなと思いました。（栄養学科） 【事例5】身に覚えのあることもたくさん取り上げられており、「私もだな」と共感しながら学んでいくことができました…現象は知っていても名前を知らなかったものも多くあり、新しく知ることができて楽しかったです…一人一人の感じ方、見え方の違いも学びました…とても楽しかったです。（栄養学科） 【事例6】有意義な内容の濃い時間を過ごすことができ、選択してよかったなと感じた…糸田先生・細江先生の講義を通して、心理学を身近に感じる事ができました。（栄養学科） 【事例7】心理学は非常に難しい授業なのかと想像していましたが、先生が作成したパワーポイントは図や映像が多く、とても分かりやすく説明して下さったので興味を持ちながら聞くことができました。（栄養学科） 【事例8】今まで20年も生きていますが、まだまだ人の心のことで知らないことがたくさんあるのだと思った。（栄養学科） 【事例9】私に見えなかったものが友達には見えていたりして、わくわくがとまりませんでした。友達と一緒に見えない部分を探して笑いあったり楽しんだり、それが心理学のいいところでもありますし、こういう見方をしたらこう見えるんだと知らない部分も知ることができてとても勉強になりました。（栄養学科） 【事例10】講義はとにかく興味深いものばかりでした…視覚的に画像を見て自分で納得しながら学ぶことができたので、とても印象に残りやすかったです。（栄養学科） 【事

**例 11** 心理学は座学の中にも「遊び」のある学びであり、楽しく学習することができた。(栄養学科) **【事例 12】** 私の中で「心理学 = おもしろい」というイメージが浮かぶようになりました。ぜひ、後輩などにも心理学の講義は受けておもしろいと、伝えたいです。(栄養学科) **【事例 13】** 毎回の授業がとても楽しかったです…たくさん実際に体験して、本当だ！どうしてなんだろう！と、どんどん興味が湧いてくる講義でした。(栄養学科) **【事例 14】** 画像や映像を沢山みせてくれたので、とても分かりやすかったです…実際に自分で体感しながら学べて楽しく授業を受けることができました…先生の実体験なども話してくれたので、少しわかりにくい心理の内容も、「そういうことか」と、理解することができました。(栄養学科) **【事例 15】** 講義はプリント・教科書にプラスして経験した話や より私たちに身近な例を挙げてくれたり、また体験する内容のものを行ったりして、楽しく、そして現実味をおびて学ぶことができました。(栄養学科) **【事例 16】** 最終的には自分がどう生きたいか、自分が魅力的だと思ったことに対して素直に生きていいんだ、と授業を通して思いました…心理学を学べて良かったです。(栄養学科) **【事例 17】** 日常の疑問を根拠つけてしくみを知ることのできる面白い授業だと思いました…映像を見たり、実際に体験して、友達とそのことについて話し合ったり、能動的に授業を受けることができ、楽しく学ぶことができました。(栄養学科) **【事例 18】** 講義は私に様々な気づきを与えてくれた。(栄養学科) **【事例 19】** 先輩にオススメされたからといった理由で受講した…自分たちも体験しながら学べるといったところに魅力を感じた…友達とワイワイ盛り上がりながら講義を受けることができた…前期だけじゃなくまだ他にも学びたかった(栄養学科)。 **【事例 20】** 全く知らなかった、聞いたことすらなかったことでも、図や映像、時には参加型の講義になっていたため、わかりやすく、覚えやすかった。(栄養学科) **【事例 21】** 教養教育科目だけど、まるで専門科目みたいだと思いました。栄養学科も(社会福祉学科のように)必修でないのではないかと思います…とにかく講義が面白くて、聞いていてあきなかったです。知らないことがいっぱい初めて聞く話や、今まで疑問に思っていたことなど内容が盛り沢山で毎週水曜日が楽しみでした。(栄養学科) **【事例 22】** 人間として共通するところもあれば、逆にヒトそれぞれなところもあり、学んでいてとても楽しかった…先生の講義は、ただ聞くという受動的な講義ではなく、実際に私たちに問いかけたり、検証をしたり、能動的に受けられる講義だったので、理解を深めることができたし、何より楽しく講義をうけることができた。他の講義とは少しちがった内容だったので、自分にはない様々な知識を得ることができた。(栄養学科) **【事例 23】** 講義はとてもわかりやすく、映像での解説や具体例・事例なども多く、イメージしやすかったです。(栄養学科) **【事例 24】** 心理学の講義は、栄養学科の授業では無いようなユニークさと、新しさを毎回の授業で持っていて本当に退屈しないので好きな講義です。(栄養学科)

## 2) 看護学科(「心理学」は選択科目)

**【事例 25】** 看護学科に入ったので、心理学について学べる機会はないと考えていました。しかし、名寄市立大学では、社会福祉学科など他学科と共に学べるすばらしい大学だと改めて感じました。もし看護学科のみの大学や看護の専門学校に行っていたら、このような素敵な講義には出会っていなかったなと思いました。看護系の講義では、緊張感があり、張りつめた空気の中、勉強しています。しかし、心理学では、実際にやってみる時間も多くあり、明るく楽しく学びました…私は今、保健師を目指しています…対象者さんの年齢や状態に合わせて使う絵や図なども心理学を活用していきたいです。(看護学科) **【事例 26】** 友達と受講していたので、個人それぞれによる見方の違いなども共有し合うことができました。医療職を目指す者として、人によって見え方が違うということの学びにもなりました。(看護学科) **【事例 27】** 色々な画像や動画をみて私たちも実際にその効果の実験をする事が多く、内容を理解しやすく、楽しむこともできました。(看護学科) **【事例 28】** 教科書やレジュメだけの講義では、現象はただの文字であり、単語であっただろう。実際にどのようなものなのかを感じることによって心理学をとても身近に感じる事ができるようになった。(看護学科) **【事例 29】** 色々な映像、図、絵などを見ることで、実際に効果を体験することができ、印象に残るものが多かったです…対人援助を目指すうえで人間に対する見方が深まりました。(看護学科) **【事例 30】** 先生の講義では、映画や写真、絵などを使って、言葉だけでは理解しづらいことでも簡単にわかりやすく感じました。(看護学科)

## 3) 社会福祉学科(「心理学」は必修科目)

【事例31】大学の授業で座学が多い中、心理学だけは毎回のように…一度だまされます。毎回はだまされないぞと思っていてもだまされます。それがとても印象にも思い出にも残し、楽しく学ぶことができました…これからは見えたからといってそれがすべて真実ではないと頭に入れたいと思います…人は言葉では言っていないでもそれが本心とは限りません…心理学は生活の様々な場面で登場し、生活を豊かにしたり、楽しくしてくれていると思いました。(社会福祉学科) 【事例32】楽しく自分の日常の不思議なことが学ばました…見えているものがすべてではないんだと思いました…物事にはしっかり名前がついていることがわかりました。日常のそれとない言動に難しい名前がついていて面白かったです。(社会福祉学科) 【事例33】前期の心理学では様々な実験を実際に体験することができ、人それぞれの見え方やとらえ方があり、答えは1つではないことを学ぶことができました。また、心理は自分の今までの経験や体験から得た情報に影響を受けやすく、思い込みや固定観念などにつながっていることがわかりました。心理学は昔から様々な研究がなされてきた分野であり、個人の心理的状況や過ごしてきた環境から構成されていくということを知りました。私たちの生活で特に結びつきの強い心理学は知れば知るほど奥深く、楽しい分野であると感じました。(社会福祉学科) 【事例34】様々な面白い現象や興味深い現象のお話が聞けて、とても楽しい講義でした。また、普段なんにも気にせずに行っている行動にも、1つ1つ、しっかり現象の名前が付いていたことにもびっくりして、勉強になりました。(社会福祉学科) 【事例35】講義は座学ではあるものの先生のユニークなパワーポイントのおかげで動きが入る楽しい講義でした。座学ではいつも眠たくなって終了の私ですが、先生の講義は見えていないとわからないものばかりのため、ずっと目を開けていられました…心理学とときと深層心理を見抜くようなイメージを持ちますが、この講義では明るく、そして軽く、授業を展開していただいたおかげで楽しく学ぶことができました。(社会福祉学科) 【事例36】これまで不思議に感じないまま、ただ、受け止めていた物事の、仕組みを知ることができたのが良かったです…改めて生物のおもしろさを感じました。(社会福祉学科) 【事例37】大学でよくある典型的なパワーポイントで内容を紹介し、穴埋めして終わる身体的に刺激のないものもなく、先生の体験や皆で実験してみたり、ダイナミックな明るい解説が関心をそそりました。そのためとても楽しく内容を知ることができました。また、講義で紹介された内容が豆知識になったり、生活する上で役に立ったりすることも考えられ、知識欲・探究心が満たされました…子どもの頃にとっても不思議に思って考えつづけていたことがこの心理学であっさり解説されてしまい、スッキリを乗り越えて、あ然となったこともありました。(社会福祉学科) 【事例38】勉強して、少しは「心」の部分について知識が深まったと感じていますが、人の「心」はまだ奥が深く謎が多いです。追求していけばいくほど、その面白さは増していくように思いました。(社会福祉学科) 【事例39】自分の体について、自分は十分に知っているつもりでしたが、まだまだ未知なことは多いということに気づきました。脳について、もっと知りたいという気持ちが強くなり…「知る」ということは、こんなにおもしろいのだと思いました。(社会福祉学科) 【事例40】先生を見て、私は毎回、「さすが心理学の先生！」と思っていました。(社会福祉学科) 【事例41】私たちの日常生活に関わるものが多く面白かったです…学んだことが将来どう活かされていくのかは今正直わかりませんが、これから社会で生活を送る上で役立つ知識を得られたと思っています(社会福祉士を目指しているのも…とても勉強になったと感じています)…わたしたちの脳がいかにだまされやすいかも学んだので、その辺りも気をつけていこうと思いました(化粧など…笑)先生の飽きさせない授業という工夫のおかげで半年間楽しかったです！ありがとうございます!!(社会福祉学科) 【事例42】新たな発見や驚きワクワクがたくさんあった…心理学を学ぶと人の行動や自分の行動に前よりももっと注意深くなったような気がする。このことは、ソーシャルワーカーなどの専門職を目指す上で大切なことだと考える…一枚のスライドを(見せはするのに、わざと)説明しないという心理学の講義(ツァイガルニク効果を体験してもらうための記憶心理学の実験)が今でも頭から離れません。(社会福祉学科) 【事例43】実際の例や、体験が多く、日常生活と心理学はこんなにも密着しているのかと気づかされました。興味深さから、後から調べ学習をしたりと好奇心を刺激され、問題意識と考え方がより柔軟になったと感じました。(社会福祉学科) 【事例44】映像を見たり、体験型の内容もあって楽しかったです。ただただ座学で理屈を聞いているだけでは分からない実際の感覚を知ることのできる講義(科目)は他にはあまりないので、出席していて楽しかったし、興味・感心(関心)が深まりました。(社会福祉学科) 【事例45】他の講義とは違い、参加型でした…たくさんだまされてしまい、それを友達と共有するのがとても楽しいと感じました…毎回とても楽しませていただいた講義でした。(社会福祉学科) 【事例46】心理学という学問はこんなにおもしろいんだと感じました…スライドを使った分かりやすい説明や、映画やテレビ、CM、本など、身近なものを使って、心理学の世界を見せて

くださったので、とても理解しやすかったです。(社会福祉学科) 【事例 47】一言で表すと、面白かった！です…心理学を学ぶことで、その時代の社会生活や環境、背景なども学べたので、とても有意義で楽しい講義でした。(社会福祉学科) 【事例 48】周りの人たちが“あぁ”とか“すごい”という反応をするたびに“見たい見たい”という思いが増しました…心理学を学んで、様々な視点から心理学をみたこと、心理学で初めて知ったこと、物覚えの悪い自分でも楽しみながら、絵などを利用して学べば理解しやすいんだということまで知ることができて、とても有意義な時間だったし、楽しかったです。心理学については唯一、自分から興味をもてたことだから、学んでいけたらいいと思います。(社会福祉学科) 【事例 49】心理学を学んで私は人間や、その他の動物に関する興味深い性質をたくさん知ることができました。(社会福祉学科) 【事例 50】心理学の内容をいかに頭に残るように伝えられるかという先生の思いが、伝わってきたなど、勝手に感じています…記憶に残りやすく学べたので、ただ字を見て、教科書を使うだけのものよりも段違いで、やって良かったなどと思えます。(社会福祉学科) 【事例 51】視覚を利用した様々な図を多く見られたことがとても楽しかった…動物を対象にした実験も多く…人間にも共通しているものもあり、同じ生物だなど思うことができた…講義(糸田先生)と特別講義(細江先生)を通して思ったのが、心理学の分野の広さである。(社会福祉学科) 【事例 52】講義を通して、当たり前のことを改めてどうしてだろうと考える機会を持ってました…好奇心をもつことはとても大切なことかなと感じました…小さな好奇心から法則などを見つけ、それを様々な社会現象と結びつけたり、それを紐解ききっかけとなったりする心理学はとても大切なことのように思えました。(社会福祉学科) 【事例 53】将来自分がやってみたい授業を見ることができました。(社会福祉学科) 【事例 54】講義を受けた後、生活のふとした場面で、これは前回講義で紹介された、あの現象なのではないかと、日々の生活がより発見に満ちあふれ楽しくなりました。(社会福祉学科) 【事例 55】とても楽しかったです。初めの授業から心理学の奥の深さ、おもしろさ、たのしさに気づき、いつのまにかどっぷりはまってしまうほどでした。また心理学を受講することで、人間という動物のあり方や、考え方、行動の仕方などを学び、より相手に対する行動や言語、仕草などを改めるようになりました(良い方につながることが多いです)。人間ってすごいなあ…笑。それくらい強い影響を受けたものでした…心理学はどの授業よりも「考える」という行為が強く、毎回自分の成長(考察する力など)を感じました…授業を受けるのは今回が最後なので悲しいです。それぐらいこの講義は思い出に残るステキな授業でした。(社会福祉学科) 【事例 56】先生の体験談も印象的でした…心理学って楽しいと感じました。(社会福祉学科) 【事例 57】脳に関するものも多くとても驚いた…授業を聞いてあきることになかった…常に笑ってられる授業をして下さってとても楽しかった。(社会福祉学科) 【事例 58】映像を使って教えてもらっていたので難しそうというイメージはなくなりました…毎回の授業に新しく知る発見が本当に多くありました…人間の脳は不思議だなど感じました…目で見るもの全てが正解や正しい事ではないんだなど思いました…自分の1つの考えだけで物事を決めつけてはいけないなども学びました。(社会福祉学科) 【事例 59】授業だけど毎回ワクワクして…楽しみながらだと人はたくさんのことを学べるのだと気づきました。(社会福祉学科) 【事例 60】実際に体験したり、先生の体験談を聞いたり、一つ一つのことを興味深く学ぶことができてよかったです…心理学を学ぶことは社会福祉にかかわる人にとって大事な視点になると考えました。(社会福祉学科) 【事例 61】社会福祉士として関連付けられる内容もたくさんあり、学ばせてもらいました。(社会福祉学科) 【事例 62】すごく新鮮でした…実際に体験して驚いたり、友人との違いを体験して驚いたり、たくさん驚きました。(社会福祉学科) 【事例 63】授業はいつも知恵の輪をしているような気分になって面白かったです!!(社会福祉学科) 【事例 64】イスに座って、ずっと難しい話ばかり聞くんだろうなと覚悟していました…心理学は面白く、声に出して笑っても大丈夫な雰囲気でとても良かったです。(社会福祉学科) 【事例 65】イラストや動画、それから実際に自分たちで体験することにより、おおいに楽しむことができました…気づいたら先生の話を夢中になっている自分がいました。(社会福祉学科) 【事例 66】私たちは先生にとっての実験マウスではないのか!?と思いました(嘘です笑) (社会福祉学科)

#### 4) 社会保育学科(「心理学」は選択科目)

【事例 67】日常の中の疑問や不思議の根拠などの説明をきき、「へー!」と思ったり、「なるほど!」と思うことがたくさんありました。(社会保育学科)

#### 4. 考察

やまだ (2019) は、ビジュアル・ナラティブにより、人と人との関係性も大きく変革され、臨床支援や教育の方法も変わると述べている。伝統的な医師と患者の関係性（二項関係「臨床関係」）では権威ある専門家が患者をベッドサイドで診る伝統的な臨床関係となるが、ナラティブ・アプローチの関係性（二項関係「対面的・対話的關係」）では人と人が対面し、相互に対話するインタラクションが可能となる。しかし、さらに新しいビジュアル・ナラティブの関係性（三項関係「並ぶ関係」「共存・共同注意関係」）では、人と人は並んで共存し、共鳴しながら、ともに同じものを見る「共同注意」を行うことができる。

保健福祉学部の「心理学」教育は、学科を超えて学部規模での講義であるため、小さな公立大学の特色のひとつとされる少人数教育は難しく、教室は中央に別々の2つの大きなスクリーンと最新の映像機器を備えた大講義室（図書館大講堂）で行わざるを得ない。ただ、かえって講堂という座席だけの環境のほうが狭い普通教室よりも、学生たちは横一列に並んで座り、しかも机がない分だけ距離が近い前の列と後ろの列とで重層的に固まるというアフォーダンス（環境の側のほうが人間に対して一定の行動を強いる性質）がみられ、前後左右で語り合いやすくなるというメリットもある。そこでは、スクリーンに大きく映し出された心理学的な多義図形や多義的事象といった同一の“刺激”を、共同注意によって、ともに見て、感じ合い、語り合うという“反応”を促すことができる。まずは全員に挙手してもらっておいでから、見えたり分かったりしたら手をおろしてくださいと教員が指示することもあれば、最初は手をおろしておいてもらい、見えたり分かった人だけ手を挙げてくださいと言う時もあるようにする。そうすると、隣どうし並んで共存し、共鳴・共感しながら、見えたとか見えなかったか、分かったとか分からなかったとか、同じ心理学的な“刺激”に対して“反応”し合い、人間の知覚・認識における共通点や差異点に気づき合い、複数の人々と感想を述べ合うというコミュニケーションが行われるようになる。「心理学」は、同じ“刺激”であっても、“皆が同じ反応になる”場合もあれば“皆が同じ反応にならない”場合もあるという人間現象の機序や法則を探求する科学でもある。“あひるか？うさぎか？”的な心理学的的事象や、“ブローケンB”的な心理学的的事象や、“羅生門（藪の中）”的な心理学的的事象などを、マンガや挿絵や動画を使って意図的に、99%がビジュアルというパワーポイントのスライドから、見て・感じて・考え、友達や近接した受講生どうしでお互いの主観的な体験を語り合い、しだいに客観的な認識も共有し合うように「心理学」教育は展開されている（三項関係「並ぶ関係」「共存・共同注意関係」）。

こうした授業を行うと、受講学生たちは未来の対人援助職者として次のような心理学的な気づきや学びなどを得てくれることが授業の感想文からわかったため、ここに再掲する。

「私もだな」と共感しながら学んでいくことができました」「一人一人の感じ方、見え方の違いも学びました」「私に見えなかったものが友達にはみえていたりして、わくわくがとまりませんでした。友達と一緒に見えない部分を探して笑いあったり楽しんだり、こういう見方をしたらこう見えるんだと知らない部分も知ることができてとても勉強になりました」「人間として共通するところもあれば、逆にヒトそれぞれなところもあり、学んでいてとても楽しかった」「個人それぞれによる見方の違いなども共有し合うことができました。医療職を目指す者として、人によって見え方が違うということの学びにもなりました」「対人援助を目指すうえで人間に対する見方が深まりました」「見えているものがすべてではないんだと思いました」「人それぞれの見え方やとらえ方があり、答えは1つではないことを学ぶことができました」「“知る”ということは、こんなにおもしろいのだと思いました」「問題意識と考え方がより柔軟になったと感じました」「友達と共有するのがとても楽しいと感じました」「周りの人たちが“ああ”とか“すごい”という反応をするたびに“見たい見たい”という思いが増しました」「当たり前のことを改めてどうしてだろうと考える機会をもてました」「日々の生活がより発見に満ちあふれ楽しくなりました」「毎回自分の成長（考察する力など）を感じました」「目で見えるもの全てが正解や正しい事ではないんだなと思いました。自分の1つの考えだけで決めつけてはいけないなとも学びました」「実際に体験して驚いたり、友人との違いを体験して驚いたり、たくさん驚きま

した」「へー！」と思ったり、“なるほど！”と思うことがたくさんありました」

そして、サトウ (2020) のいう「同じ状況を経験しながら異なる語りが生じる」というこの「心理学」教育での体験は、さらなる自己覚知や他者理解 (おなじところを さがしながら、ちがうところを おたがいに おもしろがればいいんだね) へとつながり、管理栄養士・栄養教諭・看護師・保健師・社会福祉士・精神保健福祉士・保育士・幼稚園教諭・保育教諭・特別支援学校教諭などとしてケアの未来を拓く専門職者となって以降も、より対象者の側の視点に寄り添った人間理解や対人支援で機能するに違いない。

また、「学問は依然としてことばや論理で成り立っています」(やまだ 2018) や「学問は旧態依然とした言語中心主義で語られている」(やまだ 2019) という問題に対しては、ビジュアルなスライドとプラクティスを多用する「心理学」教育の試みによって、保健福祉の学生たちは以下のような肯定的な感想を得てくれていることも感想文からわかったため、ここに再掲する。

「映像を使って教えてもらっていたので難しそうなイメージはなくなりました」「視覚的に画像を見て自分で納得しながら学ぶことができたので、とても印象に残りやすかったです」「大学でよくある典型的なパワーポイントで内容を紹介し、穴埋めして終わる身体的に刺激のないものじゃなく、先生の体験や皆で実験してみたり、ダイナミックな明るい解説が関心をそそりました。そのためとても楽しく内容を知ることができました。また、講義で紹介された内容が豆知識になったり、生活する上で役に立ったりすることも考えられ、知識欲・探究心が満たされました。子どもの頃にとっても不思議に思ってたことこの心理学であっさり解説されてしまい、スッキリを通り越して、あ然となったこともありました」「心理学の内容をいかに頭に残るように伝えられるかという先生の思いが、伝わってきたかと、勝手に感じています。ただ字を見て、教科書を使うだけのものよりも段違いで、やって良かったなと思えます」「教科書やレジュメだけの講義では、現象はただの文字であり、単語であっただろう。実際にどのようなものなのかを感じるによって心理学をととても身近に感じることができるようになった」「いつの間にか楽しんで講義を聞いていました。心理学以外の講義も、もちろん話は真剣に聞いていますが、“将来管理栄養士になるために必要なこと”だと自分に気合いを入れながら講義をうけています。しかし糸田先生の講義はおもしろくてつい聞いてしまいます。正直言うと、講義を受ける前は、他の科目の課題でもやろうかなと思っていたのに、気がついたら完全に先生の話に引き込まれています」「看護系の講義では、緊張感があり、張りつめた空気の中、勉強しています。しかし、心理学では、実際にやってみる時間も多くあり、明るく楽しく学べました。私は今、保健師を目指しています。対象者さんの年齢や状態に合わせて使う絵や図なども心理学を活用していきたいです」「講義は座学ではあるものの先生のユニークなパワーポイントのおかげで動きが入る楽しい講義でした。座学ではいつも眠たくなって終了の私ですが、先生の講義は見えていないとわからないものばかりのため、ずっと目を開けていられました。心理学ときくと深層心理を見抜くようなイメージを持ちますが、この講義では明るく、そして軽く、授業を展開していただいたおかげで楽しく学ぶことができました」「物覚えの悪い自分でも楽しみながら、絵などを利用して学べば理解しやすいんだということまで知ることができて、とても有意義な時間だったし、楽しかったです」「先生の講義では、映画や写真、絵などを使って、言葉だけでは理解しづらいことでも簡単にわかりやすく感じました」

教師を目指す学生からの「将来自分がやってみたい授業を見ることができました」という言葉もうれしい反応であった。ただし、やまだ (2018) や、やまだ (2019) が言うように、“ビジュアル”という新しいパラダイムで、言語中心主義や論理中心主義を超え、従来の時間や空間概念を超え、新しい見方と方法論を切り開き、学問の理論や方法論として練りあげていくのは今後の課題といえる。

## おわりに

専門職教育や仕事、人生においてもっとマンガを利用し、医療や対人ケア、保健福祉教育を変えようという“演習”までの実施については、この前期の大講義室における「心理学」の“講義”内では不十分であった。しかし、看護師・保健師を目指す看護学科3年生の「対象別保健指導論Ⅱ」の後期授業や保育士・幼稚

園教諭を目指す社会保育学科3年生の「保育相談支援」の後期授業においては、樹村みのり作の秀逸なマンガ作品である「病気の日」を用いた普通教室での“演習”を通して、グラフィック・メディスンやビジュアル・ナラティブを実践し、主体的で対話的な深い学び（アクティヴ・ラーニング）を得ることができた。

幼児期からの質の高いまんが絵本の読み聞かせや優れたマンガ・アニメ・映像ゲームなどのビジュアル・プラクティスを意識的に活用した大学での「心理学」教育や専門職連携教育（IPE）が積極的に推進されるならば、プロフィール帳（サイン帳）にある「好きな（好きだった）漫画」欄も再び記入されるようになっていくであろうし、対人ケアにかかわる保健福祉学とその教育もさらによりよいものへと変革され、専門職者が出会うであろう多様な人々のウェルビーイングや幸せにも関与・貢献していけるものと考えられる。

## 謝辞

名寄市立大学保健福祉学部教務委員会主催による特別講義におきまして、本学の「心理学」の講義にも振替が可能な内容で「犯罪社会心理学」と「生涯発達社会心理学」をビジュアルに講義していただきました細江達郎 岩手大学名誉教授・岩手県立大学名誉教授 に深く感謝し、お礼申し上げます。

## 引用文献

- Allport, G.W. 1942 The Use of Personal Documents in Psychological Science. Social Science Research Council. (大場安則 訳 1970 『心理学における個人的記録の利用法』 培風館 / 福岡安則 訳 2017 『質的研究法』 弘文堂)
- Czerwiec, M.K., Williams, I., Squier, S.M., Green, M.J., Myers, K.R., and Smith, S.T. 2015 Graphic Medicine Manifesto. The Pennsylvania State University Press. (小森康永・平沢慎也・安達映子・奥野光・岸本寛史・高木萌 訳 2019 『グラフィック・メディスン・マニフェスト：マンガで医療が変わる』 北大路書房)
- 藤子・F・不二雄 2019 『絵本まんが：はじめてのドラえもん』 小学館
- 細江達郎 2001 『絵と文章でわかりやすい！ 図解雑学 犯罪心理学』 ナツメ社
- 細江達郎 2012 『知っておきたい最新犯罪心理学：犯罪は日常的な、普通の人の心の延長上にある』 ナツメ社
- 木戸彩恵・サトウタツヤ 2019 『文化心理学：理論・各論・方法論』 ちとせプレス
- 樹村みのり 1999 「病気の日」 『樹村みのり作品集 [子ども編] 悪い子』 ヘルスワーク協会
- サトウタツヤ 2020 「心理学史におけるナラティブの役割」 N：ナラティブとケア 第11号 野村春夫編「心の科学とナラティブ・プラクティス」 遠見書房
- やまだようこ 2018 「ビジュアル・ナラティブと何か」 N：ナラティブとケア 第9号 やまだようこ編「ビジュアル・ナラティブ—視覚イメージで語る」 遠見書房
- やまだようこ 2019 「ビジュアル・ナラティブ」 サトウタツヤ・朝日秀朗・神崎真実 編 『ワードマップ 質的研究法マッピング：特徴をつかみ、活用するために』 新曜社
- ヨシタケシンスケ作・伊藤亜紗相談 2018 『みえるとか みえないとか』 アリス館

なお、本研究の一部は2019（令和元）年11月9日に開催された現代行動科学会第36回大会において発表されている。